

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2011年1月11日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 182】

JR東日本の革マル排除戦略の存在を証言記録が裏付け！

引き続き、JR総連元副委員長の四茂野修氏による「われらのインターVol.11」（2008年7月15日発行）の連載記事「一連のJR総連弾圧を仕組んだ者たちの素顔（上）」を紹介したい。四茂野氏は、ある公刊されている証言記録を基に、JR東日本の松崎氏や革マル派を排除する戦略の存在が裏付けられたと述べている。

3. もうひとつの証言

ところが最近、この事実を裏付ける証言記録の存在が明らかになった。そこでは、すべて実名をあげて、次のように語られている。

いっていいかどうか分かりませんが、私が勤労課長になったばかりの頃だと思うんですけども、今の会長である大塚さんが当時、人事部担当常務で、今度社長になった清野さんが人事部長でしたが、仙台にきたんです。二人揃って。そこで話し合いの場が設けられました。話し合いのメンバーはその二人と常務取締役東北地域本社長のYさん、それから総務部長と私と5人です。それで大塚さんとしては「仙台だけでも、我々が理想とする労使関係にして貰いたい。ついては、地本の委員長は管理者出身のYだし、どうか…いい関係にしてほしい」というところに真意があったのだと思います。「じゃあ革マル問題、どうするんですか」と訊くと…その頃はすでにJR東海…西は、排除の方向に是々非々で対応していましたからね。それに対して清野さんは…大塚さんは黙っていたけど…清野さんと考えは一つですから…清野人事部長が「いや、東日本は東海や西のような、そういう短絡的な労使関係はとらない。東の場合は時間をかけて、連中が牙を出してきたら、なでなでしてあげて…」つまり管理権を切り売りしてってことですね。…切り売りをして、そして「いつのまにかその牙がなくなるように、遠大な計画でいんだ」と。そういう話をして、「どうかあの、協力してほしい」という…私をなだめにきてくれたわけですね。あるいは忠告のつもりだったかもしれませんが。

証言の主は佐藤正男氏で1990年の2月に東北地域本社長の勤労課長に就任している。だからこの会合は、90年のはじめということになる。「いつこの異常な労使関係から抜け出せるんですか」と「悲痛な声」を発したのは佐藤氏自身、「牙をなくす」云々の発言の主は、『マンガローブ』の記述とは異なり、清野氏ということになる。…(中略)…JR東日本発足間もない時期、密かに松崎さんの排除が、少なからぬ経営幹部の間で真剣に企まれていたという事実には驚かざるを得ない。

浦和事件裁判の終結迫り、会社不信が加速するJR総連・東労組！

なお、この証言記録は、東京大学社会科学研究所の中村尚史助教授、水町勇一郎助教授、堀田聡子助手が聞き手となって2005年10月31日から2006年7月7日まで8回にわたっておこなわれた聞き取りをまとめたもので、『佐藤正男氏 オーラルヒストリー』という標題の冊子になっている。佐藤氏は1998年に東北福祉大学兼任講師となり、2001年からは同大学の教授を務めている。

JR東日本発足間もない時期から、現大塚会長、清野社長らによって革マル派、松崎氏の排除の戦略が考えられていたことは間違いないようだ。2007年7月のJR浦和電車区事件加害者への一審有罪判決と8月の懲戒解雇を契機に、JR総連・東労組から、この記事に象徴されるJR東日本の労政への不信が一気に噴出した。その浦和事件の上告審の判断が迫る中、偉大な指導者が死去したことで、彼らの会社不信はさらに加速しているはずだ。